

# 八幡山周辺の遺跡

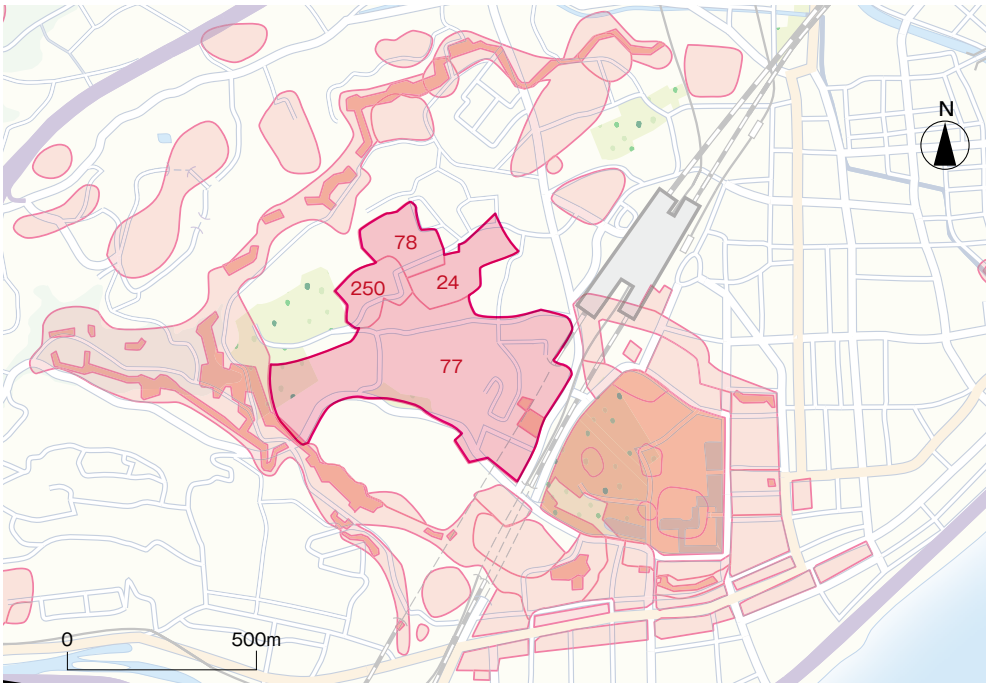
— 丘陵と谷戸に広がる原始・古代の遺跡 —



小田原市教育委員会

# 例 言

- 1 本書は、散策しながら遺跡が学べるガイドブック「小田原の遺跡探訪シリーズ」として作成しました。今回は第10号として、小田原市城山三丁目所在の県立小田原高等学校周辺の八幡山遺構群と城山二丁目ほかに所在する小田原城下香沼屋敷跡出土の原始・古代の遺跡を中心に取り上げました。
- 2 本書の刊行は、平成26年度国庫補助事業である「地域の特性を活かした史跡等総合活用支援推進事業」の一環として行いました。
- 3 本書の作成に関しては、以下の諸氏・諸機関からご指導・ご協力を頂きました。記して感謝申し上げます。(敬称略・順不同)  
戸田哲也・相原俊夫(株式会社玉川文化財研究所)、栗田一生(川崎市教育委員会)、竹内俊吾(神奈川県教育委員会)、諏訪間順・鈴木一史(小田原市観光課)、神奈川県教育委員会
- 4 本書は、小田原市文化部文化財課 渡辺千尋が担当者となり作成しました。同課大島慎一・山口剛志・佐々木健策・土屋了介・土屋健作・三戸芽・直井麻弥が補佐しました。また、図版の作成には山口由美子の協力を得ました。



第1図 八幡山と周辺の遺跡 (1/20,000) (数字は遺跡番号)

[表紙] 八幡山周辺の航空写真(神奈川県教育委員会蔵、2002年6月撮影)

[裏表紙] 八幡山古郭東曲輪第I地点出土縄文土器

# I 八幡山周辺の環境と発掘調査

## 1 八幡山周辺の自然環境

本書では、県立小田原高等学校周辺の丘陵と城山陸上競技場の東側の谷戸<sup>やと</sup>に広がる原始・古代の遺跡を紹介します。

小田原高校周辺の丘陵は、八幡山<sup>はちまんやま</sup>と呼ばれています。八幡山の名は〔正保図〕『相模国小田原城絵図』（1644～1654）に初めて見られ、この地にあった2つの八幡社に由来すると考えられています。ひとつは「本丸八幡」と呼ばれ、北条氏康が鶴岡八幡の分霊<sup>ぶんれい</sup>を勧請<sup>かんじょう</sup>したと伝えられるものです。小田原高校の東側下段<sup>ふるみやぐるわ</sup>、古宮曲輪と呼ばれる場所にあったとされています。もうひとつは「新御宮」あるいは「若宮」と呼ばれ、江戸時代初期、大久保忠世<sup>ただよ</sup>が徳川家康の長男岡崎三郎信康の霊<sup>まつ</sup>を祀ったとされるものです。小田原高校校地内の北側、三味線堀の南側にかつて存在した土塁の上にあったとされています。

八幡山の地形は箱根火山から続く東向きの丘陵地形で、小田原高校周辺で標高70mほどであった尾根は、南北に走るJR東海道本線の線路や主要地方道路小田原停車場線によって分断されていますが、小田原城本丸・二の丸のある高台へと続き、やがて



写真1 〔天保図〕『小田原城図』に描かれた八幡社（小田原市立図書館蔵）

あかがねもん  
銅門周辺で低地へとつながっています。

箱根火山から小田原の市街地へは、八幡山のほかに、北側の谷津周辺、南側の天神山周辺（シリーズ9参照）に丘陵地形が伸びています。八幡山と北側の谷津の丘陵との間には、城山陸上競技場を最奥とし、谷が入り込んでいます。競技場から小田原駅西口方面へ向かう市道0006号沿いの入谷津いりやつと呼ばれる地区に遺跡は広がり、主に小田原城下香沼屋敷跡かぬまやしきとして調査されてきました。香沼屋敷跡とは北条氏綱の子である高源院崎姫こうげんいんさきひめの娘と言われる香沼姫の屋敷があったことにちなんだ名で、別名「百間屋敷ひやっけん」などとも呼ばれています。

八幡山周辺は、八幡山古郭こかくと呼ばれる中世小田原城の城郭遺構が展開する場所として大変重要ですが、実は原始・古代の遺跡も濃密に見つかっています。また、小田原高校南側にある樹林は、シラカシヤクスノキ、ヤマモモといった照葉樹が中心に自生しています。自然のままの照葉樹林が残る場として貴重であることから、昭和46年(1971)3月に県立小田原高等学校の樹叢じゅそうとして、神奈川県指定天然記念物となって保全されています。



写真2 小田原駅方面からみた八幡山の丘陵（北から）（大上ほか 2004）

## 2 発掘調査のあゆみ

八幡山周辺では、八幡山古郭と呼ばれる中世小田原城の城郭遺構が大規模に展開していることもあり、数多くの地点で発掘調査が行われています。中でも小田原高校校地内では、本格的な調査だけでも現在までに5次にわたって行われ、重要な資料が蓄積されています。

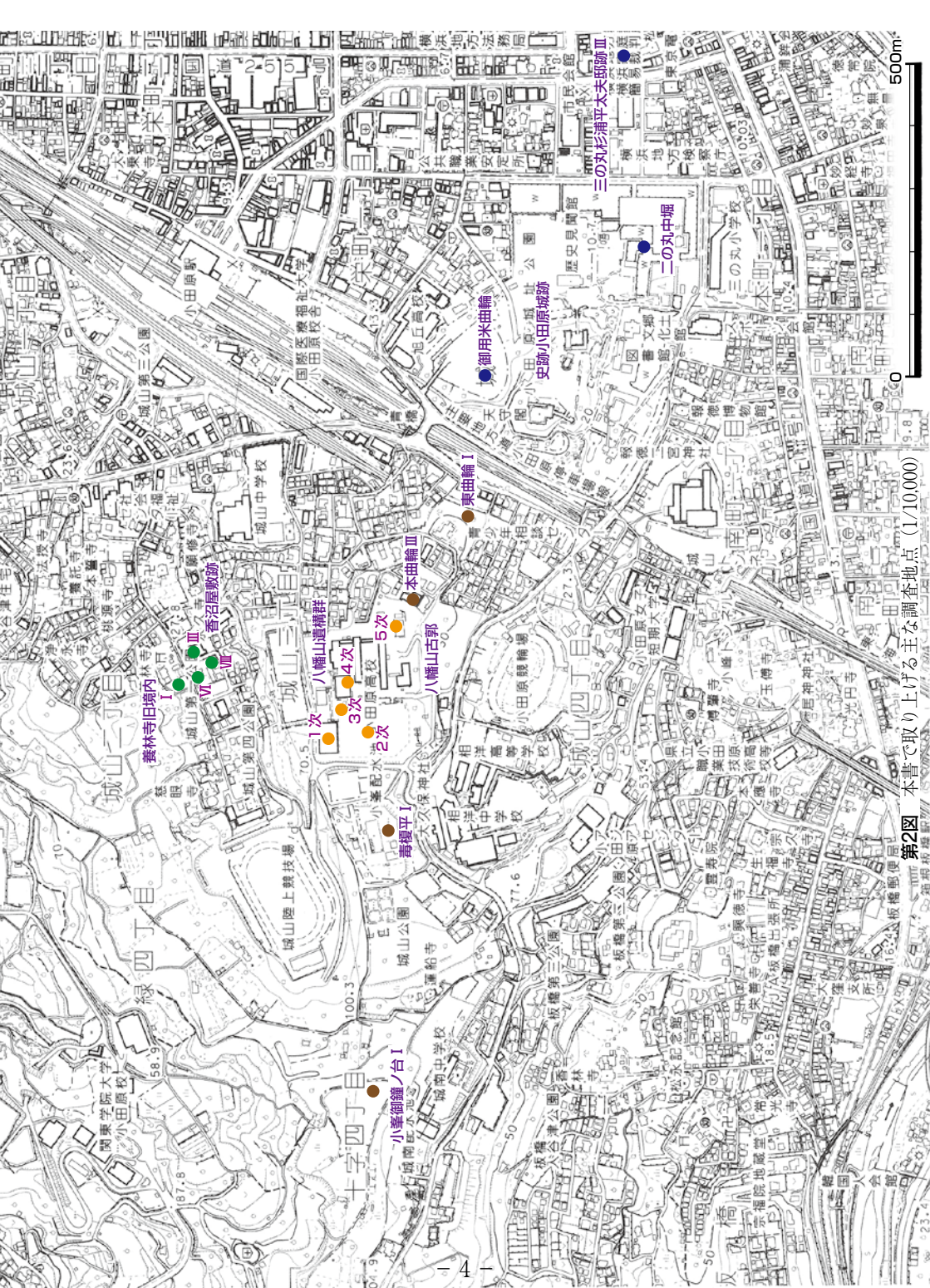
第1次調査は、昭和55年（1980）に体育館建設に伴って行われたもので、東西方向に細長い調査区が設定され、調査が行われました。その後、新校舎建設が計画され、計画予定地となったグラウンド部分で平成14年（2002）に第2次調査が実施されました。第2次調査では、中世小田原城の堀や石組井戸などが検出され、新校舎はこれらの遺構を保全するようなかたちで建設計画が見直されました。平成17年（2005）には、新校舎のライフラインの整備などに伴い、部室の跡地などで第3次調査が行われています。

新校舎完成後、旧校舎跡地ではグラウンド整備が行われることとなり、平成20年（2008）に第4次調査が、また、グラウンド整備に加え、新部室などの建設に伴い、平成21年（2009）に第5次調査が行われました。

これらの調査成果を踏まえ、小田原高校敷地については、中世小田原城の城郭遺構が良好に残り、小田原城を理解する上で重要な場所であることから、平成26年（2014）に国指定史跡に追加されました。小田原高校のグラウンド周辺には、神奈川県により遺跡散策路が整備され、一般に公開されています。

小田原城八幡山古郭東曲輪第Ⅰ地点も現在史跡公園として整備されていますが、もともとはマンション建設が計画され、それに先立ち平成17年（2005）に本格調査が行われています。この場所は、小田原城天守閣西側の小田原城二の丸と八幡山古郭をつなぐ重要な場所に位置し、小田原城周辺の景観や緑地、文化財の保存を求める市民の声が高まったこともあり、市が取得し、天守閣を望む新たなビュースポットとして市民に親しまれています。

八幡山北側の小田原城下香沼屋敷跡では9地点で調査が行われています。第Ⅰ地点が調査されたのは昭和51年（1976）のことで、小田原城下の調査の中でも先駆けとなるものでした。香沼屋敷跡は中・近世の遺跡の調査が中心ですが、平成4年（1992）に調査された香沼屋敷跡第Ⅲ地点では、弥生時代中・後期の大規模な集落跡が発見され、注目されました。



第2図 本書で取り上げる主な調査地点 (1/10,000)

500m

50

50

50

50

50

50

50

50

50

50

50

50

50

50

50

50

50

50

50

50

50

50

50

50

## Ⅱ 自然の恵みを追い求めて

### 1 小田原最古の石器（旧石器時代）

小田原市内では旧石器時代の遺跡はあまり多く見つかっていませんが、八幡山周辺などの箱根山地から伸びる丘陵に旧石器を出土する遺跡が点在しています。これまでのところ、小田原市内最古の旧石器は、八幡山古郭本曲輪第Ⅲ地点の調査で見つかったナイフ形石器と考えられています。

本曲輪第Ⅲ地点のナイフ形石器は<sup>だいけいよう</sup>台形様石器と呼ばれるもので、石器の形が台形のようなことからこのように呼ばれています。戦国時代の盛土層の中から見つかりましたが、今から約35,000年前の旧石器時代に作られたものと推定され、箱根畑<sup>はたじやく</sup>宿産と推定される黒曜石から作られています。やや大型で粗雑な作りであり、先端が破損しているため六角形状となっていますが、写真上側が刃部となり、木などの柄に装着して、突く・切る・削るなどの道具として使われた可能性が考えられています。

小田原の丘陵部で、自然の恵みを求めながら暮らしていた旧石器時代人の大切な道具だったことでしょう。



写真3 八幡山古郭本曲輪第Ⅲ地点出土の台形様石器（諏訪問ほか 2014）

## 2 縄文時代の始まり（縄文時代草創期）

八幡山周辺では、縄文時代の草創期の神子柴型石器が多く出土していることが特徴的です。神子柴型石器はシリーズ9でも紹介しましたが、長野県神子柴遺跡から発見された石器群を基準資料とするもので、土器を製作、使用し始めた縄文時代の最初期の石器群に位置づけられています。

小田原高校校地内では、現校舎建築の際の発掘調査（八幡山遺構群第2次）で2点の片刃石斧が出土しています。また、市立城南中学校のグラウンド整備に伴う小田原城小峯御鐘ノ台第I地点では、小型の神子柴型石斧が1点出土しています。近くから爪形文土器と呼ばれる人の爪や半分に割った竹の先などの道具で器面をひろく装飾することが特徴的な縄文時代草創期の土器片が出土していることも注目されます。



写真4 八幡山遺構群出土の神子柴型石器1（諏訪問ほか2014：神奈川県教育委員会蔵）



写真5 八幡山遺構群出土の神子柴型石器2  
（諏訪問ほか2014：神奈川県教育委員会蔵）

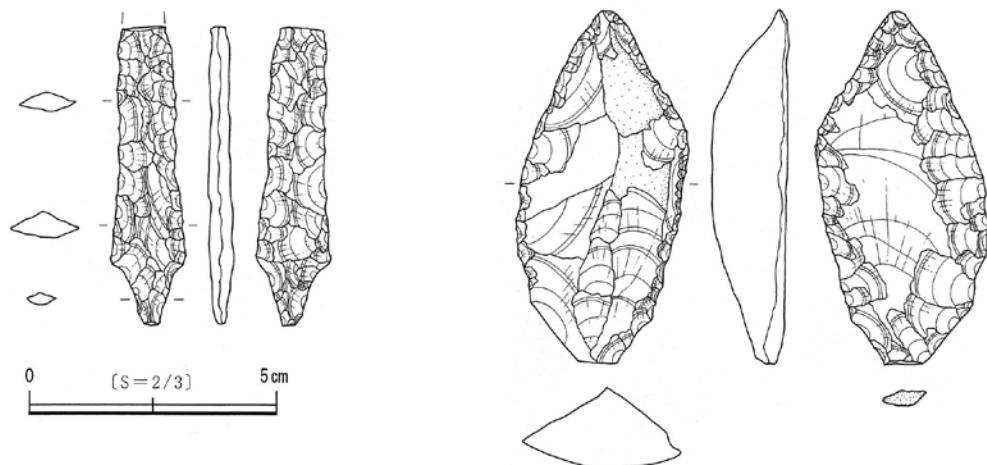


写真6 小田原城小峯御鐘ノ台第I地点出土の神子柴型石器  
（諏訪問ほか2014）



また、種子柴型石器以外では、八幡山遺構群第3次調査で先端が欠損していますが、投槍として使用されたと考えられる有茎尖頭器などが出土しています。

このように八幡山周辺は、単独の出土状態ではありますが、小田原市内の中では比較的多く縄文時代草創期の遺物が見つかり、人々の生活の痕跡が残されている場所です。



第3図 八幡山遺構群出土の有茎尖頭器（左）・尖頭器（右）（天野ほか 2006）

### 3 県立小田原高等学校校地内の調査（縄文時代早期～中期）

小田原高校の新校舎建設に伴う八幡山遺構群第2・3次の調査では、縄文時代の土器・石器などがまとまって出土しています。現在の校舎が建つ場所は、元々は東向きの斜面地になっていたようですが、旧グラウンドの造成によって西側部分は平らに削られてしまっていました。縄文時代の遺物は標高約68mより東側の谷部から集中して見つかりました。

出土した土器は、縄文時代早期・前期末～中期中頭・中期・後期の広範な時期のものが認められ、比較的長期間断続的に土地利用されていたことが推定されます。特に縄文時代早期の土器がまとまって出土していることが特徴的で、市内でも有数の出土量を誇っています。特に細い丸棒に連続した山形や楕円を彫刻し、それを土器の外面に回転させて幾何学的な文様をつけた押型文系土器が一定量出土していることが注目されます。中部地方を分布の中心にもつ押型文系土器には、それに伴う特徴的な石器



写真7 小田原高校の包含層出土状況（大上ほか 2004）



写真8 小田原高校校地内出土の縄文時代早期土器（諏訪間ほか 2014：神奈川県教育委員会蔵）

もいくつか知られています。

局部磨製石器<sup>きょくふませいせつき</sup>は、鏃の形をした石器で、ほぼ全体的に磨耗していることが特徴的です。磨耗して表面がトロトロした質感になることから、別名「トロトロ石器」と呼ばれています。第2次調査と第3次調査で1点ずつ出土していますが、一遺跡から複数点出土することは珍しいことです。石材は、2点ともにチャートという緻密な石が用いられています。局部磨製石器に一般的な石材であることから、石器の機能と関係があるようですが、石器がどのような使われ方をしたのかも不明で、謎に満ちた石器と言えます。

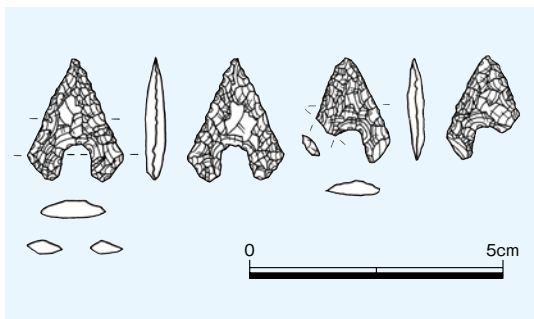
鍬形鏃<sup>くわがたざくえく</sup>は、挟りの部分がU字形で、角張った幅広の脚の石鏃で、八幡山遺構群の調査では、2点が出土しています。石材はいずれも黒曜石が用いられています。

特殊磨石<sup>すりいし</sup>は、円柱状または角柱状の礫の側面が研磨される磨石です。別名「穀摺石<sup>こくずりいし</sup>」などの名前もありますが、用途は判然としません。第2次調査で3点、第3次調査で2点出土しており、石材はいずれも安山岩を用いています。

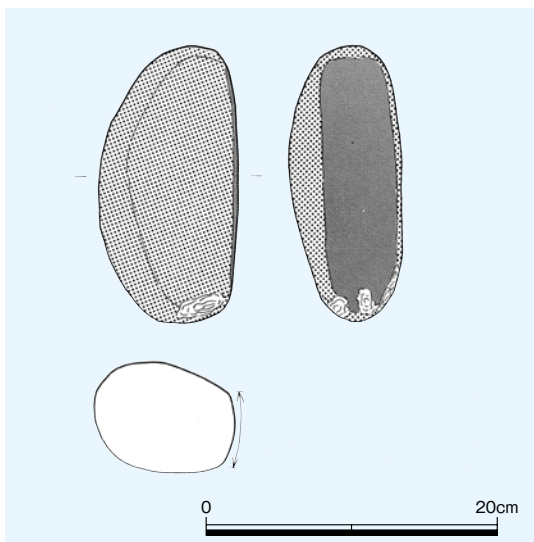
こうした多量の遺物のほかに遺構も集石と埋設土器が見つかっていま



写真9 局部磨製石器  
(諏訪間ほか 2014：神奈川県教育委員会蔵)



第4図 鍬形鏃 (大上ほか 2004)



第5図 特殊磨石 (大上ほか 2004)

す。集石は直径約1.2m程度、深さ25cmの不整円形の掘り込みの中に、総計142点、総重量123.5kgもの石器や礫が充填された状態で出土しました。最下層は扁平な礫を意図的に平らに並べている様子が観察されました。充填された礫の7割近くは石器類で、石皿が37点、磨石が56点、凹石が4点出土しています。礫の82%は被熱しており、アースオーブンのような機能を果たしていた可能性も考えられます。



写真10 集石（大上ほか 2004）

また、埋設土器は直径約25～30cm、深さ約20cmの穴に底部を下にして埋められた状態で見つかりました。土器の口の部分はグラウンドの整地の際に破損し、土器の脇から押しつぶされた状態で出土しています。埋設されていた土器は、中期末の曾利Ⅴ式（り5）と呼ばれる時期のものです。



写真11 屋外埋設土器（大上ほか 2004）

このように小田原高校校地内では、中世の堀や学校利用に伴う土地造成の影響を大きく受けていますが、幅広い時期の土器が出土し、比較的継続的な土地利用が推定されます。住居跡など具体的な生活の痕跡が見つかっていないのが、今後の課題です。周辺では、城山陸上競技場造成時の昭和37年（1962）に敷石遺構（しまいし）が出土しています。発見当時は縄文時代の敷石住居跡の可能性も考えられていましたが、現在では小田原城御前曲輪（こぜんくるわ）に伴う祭祀遺構と評価されています。敷石遺構は管理棟前に移築保存されています。

#### 4 科学分析から探る縄文社会

八幡山遺構群第4次調査では、縄文土器の胎土分析が行われています。胎土分析には、土器のプレパラートなどを作成し、岩石や鉱物の種類と量を把握する方法や、蛍光X線分析などにより土器の成分と組成を元素レベルで化学的に測定する方法などいくつかの手法があります。八幡山遺構群第4次調査では、縄文時代早期の押型文系土器2点と前期の在地系土器1点、東海系2点の計5点を対象にプレパラートを作成し、偏光顕微鏡による観察が行われました。

その結果、いずれの土器片からも花崗岩類の岩石片が含まれる特徴から、土器の素材となった粘土や混和材である砂の採取された場所が、八幡山周辺ではなく、甲府盆地の東部地域である可能性が指摘されています。分析資料数が少なく、課題も残りますが、考古学的にみた土器の特徴と異なる分析結果は、複雑な土器の動きを示している可能性が考えられます。

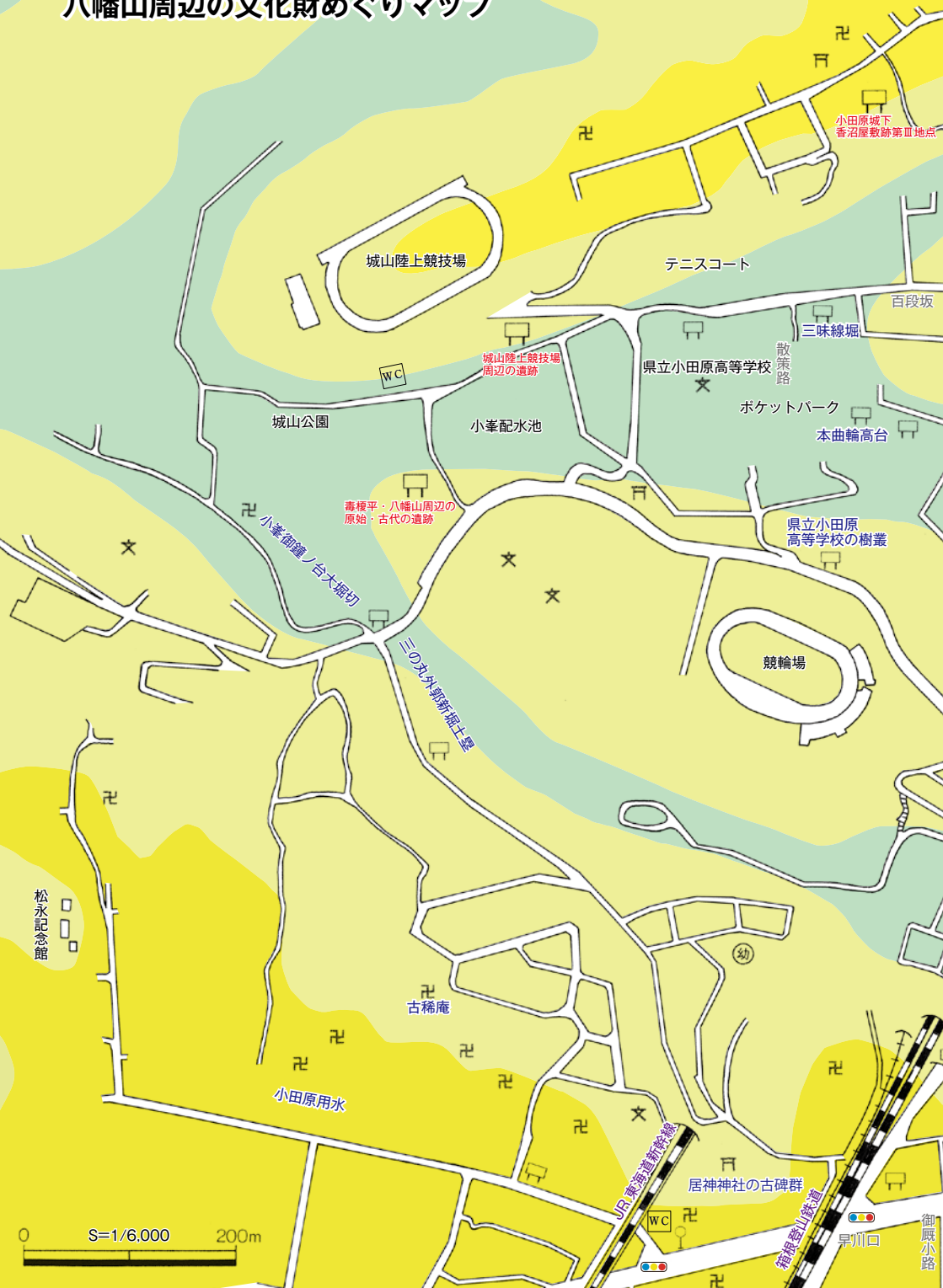
東曲輪第I地点では、縄文時代の炉跡1基、土坑27基、ピット117基が検出され、縄文時代前期末十三菩提式～中期初頭五領ヶ台I式期の集落跡と考えられています。黒曜石片も341点出土していますが、蛍光X線分析による黒曜石の産地推定が行われています。黒曜石は産出地が限られ、産地ごとに黒曜石の化学成分比がわずかに異なるため、古くから産地推定やそれに基づく黒曜石の移動についての研究が行われてきています。

小田原周辺の黒曜石の主な産地としては、信州、神津島、箱根伊豆、高原山が知られていますが、東曲輪第I地点で分析可能であった325点の黒曜石は、神津島恩馳島産が284点（87.4%）、諏訪星ヶ台産が39点（12.0%）、天城柏峠産と箱根黒岩橋産が1点ずつ（0.3%）との分析結果が得られました。良質な黒曜石を求めて、遠隔地の石材を手に入れていた縄文人の姿が想像されます。



第6図 黒曜石の主要原産地（池谷 2009 に加筆）

# 八幡山周辺の文化財めぐりマップ



小田原城下  
香沼屋敷跡第三地点

城山陸上競技場

テニスコート

百段坂

三味線堀

県立小田原高等学校

散策路

ポケットパーク

本曲輪高台

城山公園

小峯配水池

城山陸上競技場  
周辺の遺跡

毒櫻平・八幡山周辺の  
原始・古代の遺跡

小峯御鐘ノ台大掘切

県立小田原  
高等学校の樹叢

競輪場

三の丸外郭新堀土塁

松永記念館

古稀庵

小田原用水

居神社の古碑群

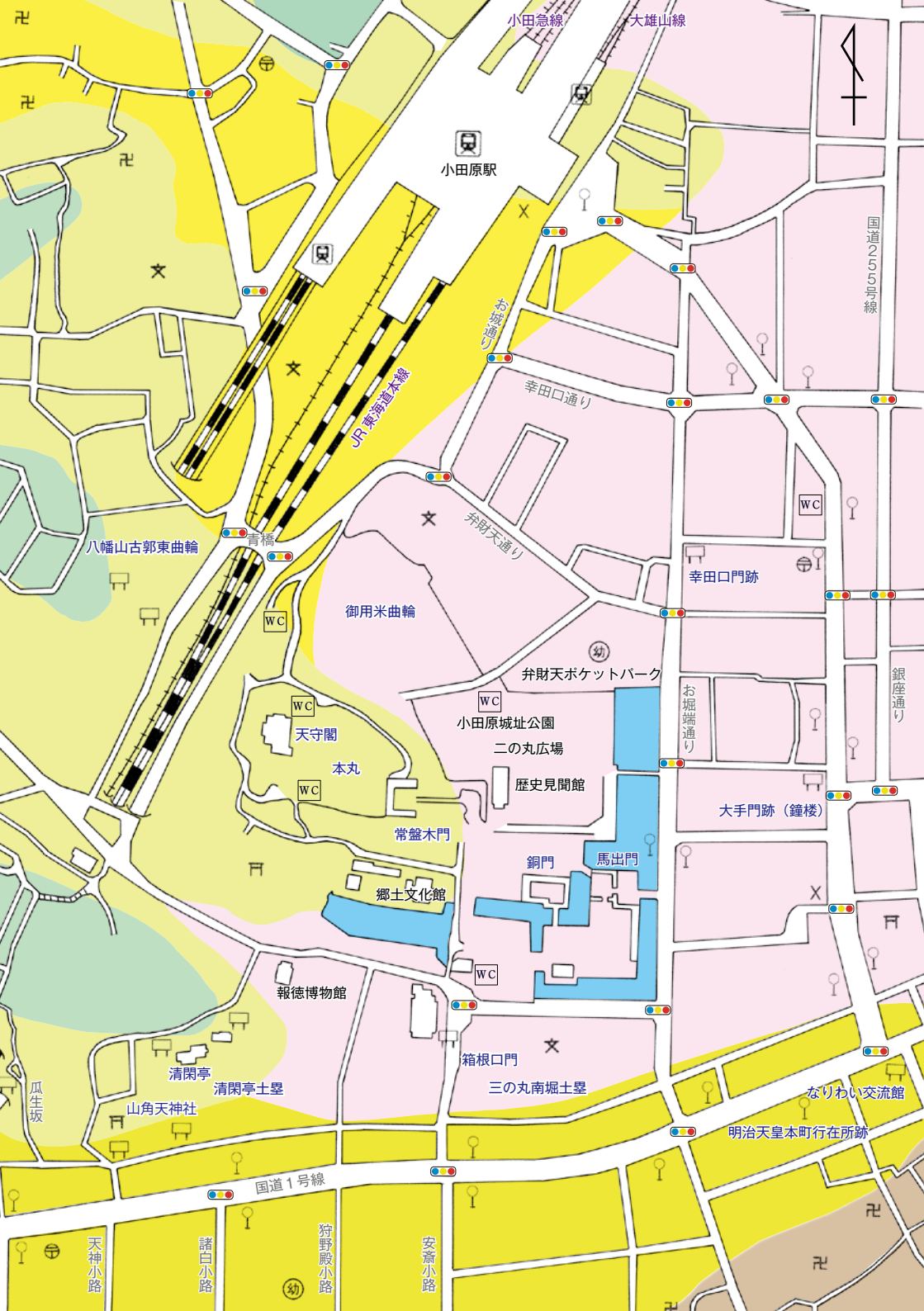
JR 東海道新幹線

箱根登山鉄道

早川口

御厩小路

0 S=1/6,000 200m



小田急線

大雄山線

小田原駅

JR 東海道本線

お城通り

幸田口通り

国道1号線

八幡山古郭東曲輪

青橋

御用米曲輪

弁財天通り

幸田口門跡

弁財天ポケットパーク

天守閣

本丸

小田原城址公園

二の丸広場

歴史見聞館

お堀端通り

大手門跡(鐘楼)

常盤木門

銅門

馬出門

郷土文化館

報徳博物館

箱根口門

三の丸南堀土塁

なりわい交流館

清閑亭

清閑亭土塁

山角天神社

明治天皇本町行在所跡

国道1号線

天神小路

諸白小路

狩野殿小路

安倉小路

### Ⅲ 弥生文化の広まり

#### 1 須和田式土器と石鋤（弥生時代中期）

弥生時代は、日本列島で本格的な水稲耕作が開始された時代です。北部九州から次第に広がった稲作文化は、弥生時代前期にはまだ関東地方へは到達していません。弥生時代中期中葉になると、中里遺跡のように関東地方にも本格的な水稲耕作を行う集落が出現します。

香沼屋敷跡第Ⅲ地点の調査では、弥生時代中期中葉の住居跡が2軒見つかっています。23号住居跡からは須和田式土器の壺形土器と耕起具の石鋤が出土しています。土器は棒状の工具で引いた沈線による区画と縄文を組み合わせた特徴的な文様がつけられています。石鋤は住居跡の柱の脇の床面から出土しました。長さ27.2cm、最大幅7.0cm、厚さ3.4cmの大きさで、重さ1,170gのとても重量感のある石鋤です。石材は安山岩が用いられ、刃の部分は両側から加工がされています。

また、26号住居跡からは条痕文の甕が見つかっていますが、その底面には土器の製作時に付けられたと考えられる布目の痕跡が明瞭に残っています。紡織技術が発達し、織布が一般的に普及していたことが推定されます。

足柄平野の真ん中に造られた中里遺跡とは異なり、谷戸に小規模な集落を営み農耕を行っていた様子を出土資料からうかがうことができます。

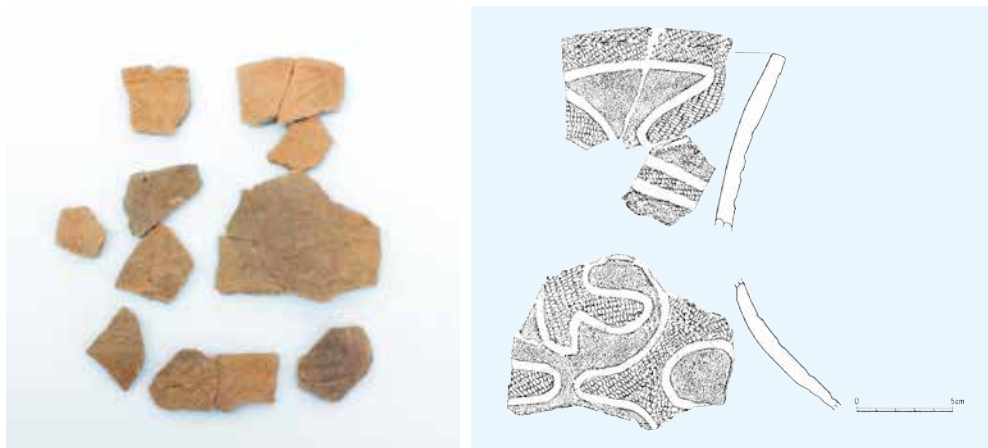


写真 12・第 7 図 須和田式土器（図：小林ほか 2004）





写真13 石鋌出土状況（小林ほか 2004）



写真14 布目痕の残る土器（諏訪間ほか 2014）

## 2 八幡山北側の谷戸に営まれた集落

香沼屋敷跡第Ⅲ地点では、弥生時代後期の住居跡33軒、掘立柱建物跡2棟、土坑3基などが検出されています。また、幅50～80cm、深さ30～50cmの溝状遺構が南北方向に平行して18条検

出され、住居廃絶後に降雨によって削られた自然の流路と推定されました。後期の住居は、中期中葉の住居よりもさらに標高が低い場所に造られる傾向があります。住居跡はいくつかが重層的に切り合って構築され、平面形にも違いがあることなどから、時期差が考えられ、ある程度継続して人々が暮らしていたことが推定されます。



写真15 香沼屋敷跡第Ⅲ地点全景（北西上空から）  
（小林ほか 2004）

18号住居跡は調査区の北西隅で検出された住居跡で、推定で長軸11m程度の大型住居跡の約2/5が調査されました。床面には焼けた土や炭化物が全体的に5cm程度の厚さで堆積し、壁際には板状の炭化材が貼り付いていたことなどから、火災を受けた住居跡と考えられました。焼けた土や炭化物の中からは、壺や甕など多くの土器が出土しています。

弥生時代



写真 16 重複して検出される住居跡（南から）  
（小林ほか 2004）



写真 17 18号住居跡遺物出土状態（北東から）  
（小林ほか 2004）



写真 18 18号住居跡（南東から）（小林ほか 2004）

第Ⅲ地点周辺では、西側に位置する第Ⅵ・Ⅷ地点や北西側の養林寺旧境内遺跡第Ⅰ地点でも弥生時代後期を中心に遺物が出土し、集落の広がりが推定されています。第Ⅵ地点では、東海地方西部をはじめ中部高地や北武蔵系といった遠隔地の土器が多く出土していることが注目されます。



写真 19 18号住居跡出土遺物

### 3 丘陵上の集落と特殊な出土遺物

八幡山の丘陵上の小田原高校校地内でも弥生時代後期から古墳時代前期にかけての住居跡が密集して出土しています。丘陵上と谷戸にある集落とでは、生活している集団が全く異なるのか、興味深いところです。

小田原高校校地内の集落は、西側が特に後世に削られているため、全体の規模は不明ですが、小峯配水池内の毒椀平第Ⅰ地点においても、同時期の住居跡と推定される土層が確認されているため、小田原市域東側の森戸川流域に広がる千代遺跡群や永塚遺跡群、国府津三ツ俣遺跡に匹敵するような規模の集落の可能性が高いと考えられます。出土遺物にも特殊な遺物がいくつか見られます。

銅鏃（どうせき）は八幡山遺構群第1・3次調査で計2点が住居跡から出土しています。状態はよくありませんが、狩猟などに用いられた実用品の可能性が考えられます。



写真 20 銅鏃出土状況（天野ほか 2006）

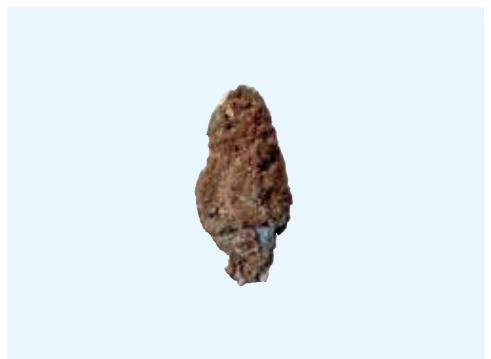


写真 21 銅鏃（天野ほか 2006）

また、第3次調査では、住居跡から片口鉢かたくちほちが出土しています。口径13.1cm、底径6.4cm、高さ7.2cmの大きさで、ベンガラを用いて内外面が赤彩されています。口が付いていることから、中に液体を入れて使用したことが推測されます。このような片口鉢は、小田原市内では永塚下り畑遺跡第IV地点で住居跡から出土しています。

県内では、海老名市秋葉山古墳群など墳墓から出土する遺物に同様のものが認められます。中に水銀朱が入られ、火を使用した祭祀に用いられたことが推定されています。八幡山遺構群の片口鉢は使用方法が多少異なると思われるのですが、やはり日常的ではなく祭祀などに用いられたものと推定されます。



写真 22 片口鉢 (天野ほか 2006)

#### 4 墓地の造営

集落の東側、東曲輪第I地点の調査では、古墳時代前期の方形周溝墓ほうけいしゅうこうぼが見つっています。方形周溝墓は、周囲に溝が四角くめぐり、中央に埋葬施設が設けられた形態の墓です。一般的には中央には土を盛り上げた墳丘があると考えられていますが、後世の削平などにより、周囲の溝のみが残存していることがほとんどです。



写真 23 方形周溝墓 (片平ほか 2006)



写真 24 方形周溝墓出土器 (片平ほか 2006)

東曲輪第Ⅰ地点で発見された方形周溝墓は、東側が後世に削平されているため遺存状態があまり良くありませんが、一辺が14m程度の大きさと推定され、北西側の一隅の周溝が切れる形態のものと考えられます。遺体を埋葬した主体部などは明らかになっていません。

北側の周溝からは、小型の壺形土器が出土しています。首の部分が短い短頸壺なんけいこと呼ばれるもので、口径9.5cm、底径4.0cm、高さ12.2cmのやや扁平な形の土器です。方形周溝墓における儀礼に使用された可能性も考えられます。

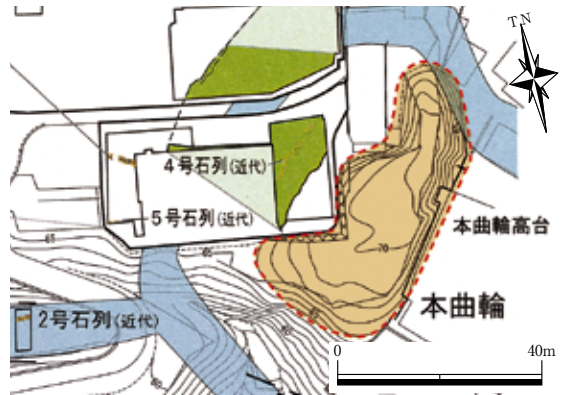
## 5 壺形埴輪の出土

小田原高校校地内で行われた八幡山遺構群第4次調査では、足柄平野一帯で初めて壺形埴輪つぼがたはにわが出土するという大きな発見がありました。

壺形埴輪は、中世小田原城の本曲輪北堀の最上層、旧プール更衣室基礎の真下から発見されるという、まさに奇跡的な出土状況でした。

少なくとも2個体分の埴輪片9点が出土しました。古墳時代前期、4世紀後半に位置付けられる資料です。一連の小田原高校での調査を通じて初めて埴輪が出土したこともあり、近くに古墳が存在すると考えられ、出土地点の南東側にある高まりが古墳の一部であることが予測されました。

この高まりは、本曲輪高台たかだいと呼ばれ、中世小田原城の櫓台やぐらだいとしての機能が想定されていました。高台は相模湾が一望できるような眺望に優れた場所に位置し、古墳の立地としても条件の良い場所であ



第8図 本曲輪高台位置図（吉田ほか 2010 に加筆）



写真 25 本曲輪高台現況（諏訪間ほか 2014）



写真 26 壺形埴輪（吉田ほか 2010）

ることが出来ます。高台が前期古墳であるとする、小田原市内では明確な前期古墳の初例となり、ヤマト政権の東国進出や足柄平野における古墳時代の成立と大きく関わることになります。市立城南中学校のグラウンドで行われた小田原城小峯御鐘ノ台第Ⅰ地点の調査においても、壺形埴輪に似た精緻なつくりの壺形土器の口縁部が出土しています。本曲輪高台の詳細な調査や八幡山周辺での今後の調査に期待が掛かっています。



写真 27 小峯御鐘ノ台第Ⅰ地点壺形土器

古墳時代中期以降の八幡山周辺は八幡山遺構群や谷戸の養林寺旧境内遺跡第Ⅰ地点で、土器が散発で出土するのみであり考古学的に明らかになっていません。古墳時代後期には天神山などに古墳が造成されることから、今後同様な立地の八幡山周辺でも発見される可能性は少なくありません。

## IV 小田原城の足元を探る

### 1 小田原城のはるか昔

八幡山の尾根は、小田原城本丸・二の丸方向へと伸びています。天守閣のある本丸一帯は関東ローム層が基盤となっていますが、かつて屏風岩びょうふういわと呼ばれた天守閣の西側の場所にある遊園地のトンネルでは、約65,000年前の箱根火山の爆発的噴火によってもたらされた東京軽石層が観察できます。東京軽石層の上には通常関東ローム層が堆積しているため、小田原城築城のために大規模な削り込みが行われていることが推定されています。

二の丸中堀の調査では、中堀の南側に縄文時代前期までに形成された砂層をベースとする低地が広がっていることが確認されるとともに、本来はこのあたりまでローム層基盤の八幡山の尾根が伸びていたことが推定されています。二の丸中堀は二の丸と馬屋曲輪うまやまがま・御茶壺曲輪おちやつぼを区画する堀で、銅門すずみよしぼしや住吉橋の周辺が丘陵の先端部ということになります。

小田原城の本丸・二の丸周辺にも、本来は八幡山と一連の遺跡が広がっていることが地形からは予想されます。しかし、小田原城の史跡整備は、江戸時代末期の姿を標準として進められているため、史跡整備の発掘調査では、古代以前の土層まで調査する機会はほとんどありません。また、中世・近世の大規模な土地利用によって、大きく姿を変えていることもあり、得られる資料は限定的ではあります。しかし、そのような資料の中にも優品が少なくありません。小田原城以前に「城内」で生活していた人びとの姿を見ていきましょう。

### 2 小田原城出土の考古資料

城内最古の資料は、御用米曲輪ごようまい出土の旧石器時代の石核せきかくです。昭和57年度（1982）に実施された調査で出土したもので、丘陵の北側斜面のローム層中から発見されました。石核は石器の素材となる剥片はくへんを打撃を加えて製作した後に残された中心部分のことです。御用米曲輪の石核は拳大ほどの大きさですが、写真上方の自然面を打ち、周囲から長さ6～7cm程度、幅2cm前後の縦長の剥片を作り出したものと考えられます。



写真28 御用米曲輪出土石核（諏訪間ほか2014）



写真29 二の丸中堀漆塗木製容器出土状況



写真30 二の丸中堀漆塗木製容器

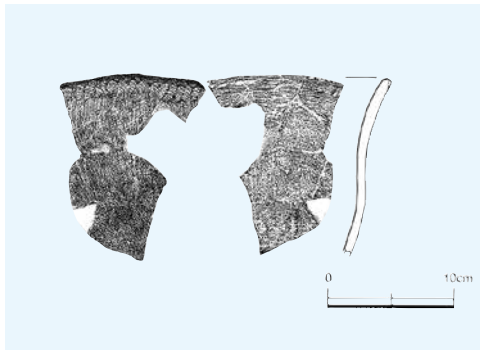
縄文時代では、二の丸中堀の堀底で縄文時代中期初頭、五領ヶ台式期の遺物包含層が確認されています。住吉橋の橋台付近の堀底の黒色粘土層からは漆塗りの木製容器が出土しています。土の重みによって押しつぶされた状態ではありますが、全体の形をとどめています。

削り出しによって長方形の把手が付けられ、把手の背面に1箇所、容器の口の部分に2箇所のつまみ状の突起が残っています。容器の縁の部分のみ赤漆を塗り重ね、黒との見事なコントラストになっています。周辺には他にも漆製品や木製品などが大量に眠っていることが予想されます。

こうした低地遺跡の様相は、御茶壺曲輪北側の中堀の下層から弥生土器や土師器とともに木杭や板材が出土していることから、縄文時代に限らず丘陵が低地とつながる部分に連続と続いていることが考えられます。

また、現在小田原地方裁判所の建つ三の丸杉浦平太夫邸跡第三地点では、須和田式みやのだいに後続する時期の弥生時代中期宮ノ台式





第9図 宮ノ台式土器（木村ほか 2002）



写真31 御用米曲輪出土の古代の甕

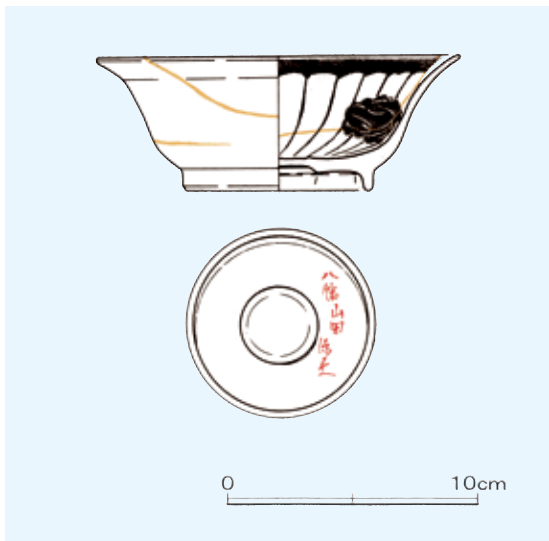
の土器片が見つかっていたり、御用米曲輪で8世紀の甕が出土したりしていることから、小田原城址公園周辺は八幡山周辺で遺構・遺物が希薄であった時期と相互補完的なあり方が推定されます。

### 3 小田原・関東の中心として

小田原城の起源については定かではありませんが、15世紀中頃には文献史料にその名を確認することができます。八幡山周辺は大森氏、そして関八州に覇を唱えた小田原北条氏の居城、小田原城の一角として機能していたことが考えられています。

慶長19年（1614）大久保忠隣<sup>ただちか かいえき</sup>の改易後、八幡山<sup>おとめやま</sup>一帯は御留山として立ち入りが禁じられ、御山守<sup>やまもり</sup>と呼ばれる人々が管理をしていたとされています。

八幡山遺構群第2次調査で出土した石組井戸は、大型の立派なもので、小田原高校の中庭に保存・復元されています。井戸跡からは18世紀後半から19世紀の陶磁器などが多量に出土しています。「八幡 山田源兵へ」という朱書きのある焼継ぎされた鉢が出土しており、「文久図」に記載され、八幡山に屋敷を構える「山守 山田源兵衛」との関わりが推定されています。



第10図 「八幡 山田源兵へ」（大上ほか 2004）

時代区分		主 な で き ご と	本書に登場する事柄	
旧石器時代		箱根火山の爆発的噴火		65000 年前
	後期 草創期	細石刃が日本列島全体に広まる 土器・石鏃の使用が始まる	台形様石器 神子柴型石器	16000 年前
縄文時代	早期	定住化の進行 気候温暖化による海水面上昇（縄文海進）	押型文系土器と石器	11500 年前
	前期	羽根尾貝塚がつくられる		
	中期	東日本で環状集落がつくられる 久野一本松遺跡の環状集落	二の丸中堀の漆容器 屋外埋設土器	5500 年前
	後期	祭祀具の発達		4500 年前
	晩期 前期	水稻耕作の本格的な開始		
弥生時代	中期	中里遺跡の出現 奴国王、後漢光武帝より金印を受ける	須和田式土器・石鏃	57
	後期 前期	前方後円墳の築造開始	香沼屋敷跡第Ⅲ地点 方形周溝墓 壺形埴輪	
	中期 後期	仏教伝来 久野古墳群		538
古墳時代	飛鳥時代	大化の改新 千代寺院跡の造営		645
	奈良時代	平城京へ遷都		710
	平安時代	平安京へ遷都	御用米曲輪の甍	794
古代	鎌倉時代 南北朝時代 室町時代	源頼朝が征夷大將軍に任じられる		1192
	安土桃山時代	小田原城が築城される 小田原城総構の完成 豊臣秀吉の小田原攻め	八幡山古郭	1590
中世	江戸時代	江戸幕府が開かれる 富士山宝永の大噴火 ペリー来航	正保図 八幡 山田源兵へ	1707 1853
	明治 大正 昭和	明治改元、五箇条の誓文の公布 太平洋戦争終結	小田原高校の建設	1868 1945
近世 近・現代				

## 文 献

- 天野賢一ほか 2006 『小田原城跡八幡山遺構群Ⅲ（第3次調査）』 かながわ考古学財団調査報告 201、財団法人かながわ考古学財団
- 池谷信之 2009 『黒曜石考古学』 原産地推定が明らかにする社会構造と其の変化、新泉社
- 大島慎一 2010 「酒匂川右岸：八幡山の壺形埴輪片と周辺の遺跡」 『シンポジウム 古墳時代の始まりと足柄平野』 記録集、小田原市教育委員会
- 大島慎一ほか 1994 『二の丸中堀Ⅱ』 小田原市文化財調査報告書第 48 集、小田原市教育委員会
- 大上周三ほか 2004 『小田原城跡八幡山遺構群Ⅱ（第2次調査）』 かながわ考古学財団調査報告 161、財団法人かながわ考古学財団
- 押方みはるほか 2002 『秋葉山古墳群第 1・2・3 号墳発掘調査報告書 - 第 5～9 次調査』 海老名市教育委員会
- 片平 剛ほか 2006 『小田原城八幡山古郭東曲輪第 1 地点』 パル文化財研究所
- 木村吉行ほか 2002 『小田原城三の丸杉浦平太夫邸跡第Ⅲ地点』 かながわ考古学財団調査報告 141、財団法人かながわ考古学財団
- 河野喜映 1984 『小田原城跡八幡山遺構群』 神奈川県立埋蔵文化財センター調査報告 5、神奈川県立埋蔵文化財センター
- 小林義典ほか 2004 『小田原城下沼汐屋敷跡Ⅲ・Ⅳ地点』 小田原市文化財調査報告書第 121 集、小田原市教育委員会
- 諏訪間順 2004 「十字四丁目 1065-1 外における試掘調査」 『平成 13 年度試掘調査』 小田原市文化財調査報告書第 117 集、小田原市教育委員会
- 諏訪間順ほか 2014 『いにしへの小田原～遺跡から見た東西文化の交流』 平成 26 年度小田原城天守閣特別展、小田原城天守閣
- 田中琢・佐原真編 2002 『日本考古学事典』 三省堂
- 塚田順正ほか 1984 『史跡小田原城跡城米曲輪』 小田原市文化財調査報告書第 15 集、小田原市教育委員会
- 吉田智哉ほか 2010 『小田原城跡八幡山遺構群Ⅳ（第 4・5 次調査）』 かながわ考古学財団調査報告 254、財団法人かながわ考古学財団

小田原の遺跡探訪シリーズ 10

### 八幡山周辺の遺跡

—丘陵と谷戸に広がる原始・古代の遺跡—

平成 27 年 3 月 17 日 印刷  
平成 27 年 3 月 25 日 発行

編 集 小田原市教育委員会  
発 行 〒 250 - 8555 小田原市荻窪300番地  
電 話 0465 - 33 - 1715  
<http://www.city.odawara.kanagawa.jp>  
E-mail:bunkazai@city.odawara.kanagawa.jp  
印 刷 有限会社 石橋印刷

